

① 次の各文の——をつけた漢字の読みがなを書け。

(1) 冷たいわき水でのどを潤す。

(2) 栽培しているトマトが色づく。

(3) スポーツと音楽鑑賞で余暇を過ごす。

(4) 医学の進歩に貢献した人々の伝記を読む。

(5) 図書館で、郷土の歴史について詳しく調べる。

② 次の各文の——をつけたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) バスの窓から、変化にトむ風景を眺める。

(2) チュウヤの別なく鉄道の復旧工事が進む。

(3) 多くの人がノゾんでいた美術館が完成した。

(4) 緑化運動の一環として、公園にシヨクジュする。

(5) 災害に備えて、キケンな場所がないか点検する。

③ 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

僕は靴を脱ぎ裸足になって櫟の木に登り始めた。櫟は二人の手をいっぱい伸ばしてやっ指先がつかめるくらいの大さだった。初めの枝は地面から四メートルくらいのところであり、巢はそこからひとつふたつみつめの枝先にあった。初めの枝に手がかかったとき秋は辺りの気配をうかがった。辺りは虫の声に包まれていた。陽は山に沈みかけていた。僕は耳を澄まし巢をじっと見上げた。秋は僕を見てうなずき、慎重に二番目の枝に手をかけた。前を登っていく秋の背に大きな毛虫を見つけた。僕はちいさい声

で秋と呼んだが、秋は振り向いて人差し指を立ててしゅいっという仕種をした。その目は笑いを一生懸命こらえているように輝いていた。今、一言でも喋ったら吹き出してしまおうとも言わんばかりに。

(1) 秋の目は魔法のようだと僕は思っていた。なんだかかこちちまで楽しくなるような感じがしてくるのだ。その瞳はたちまちあらゆるものを巻き込んでしまうような強い輝きを放っていた。木の葉の間からもれてきた真つ赤な陽をあびながら僕は何も喋らなかつた。

僕は三番目の枝で秋に追いつくと手を伸ばして毛虫をはらつてやつた。風がそよそよと木の葉を揺らした。木の葉が風に揺られて魚のように動いた。そのくねるような動きはまるで生きているかのようにだった。この大きな木はきつと億万の魚の群で、秋と僕をどこか見知らぬ広いところへ運んで行くのに違いないと僕は思った。

僕は巢の枝に手をかけて伸び上がりそつと巢を覗き込んだ。僕は、はあつと思わず止めていた息をもらし顔を見合わせた。そこには二匹のフクロウの子供がいた。赤ん坊と言つてもよかつた。灰色のぼわぼわとした産毛におおわれた掌にのるくらい小さいな二匹のフクロウは僕達に向かって必死に鳴っていた。まるで鳴くのが楽しくって仕方がないというように潑刺と顔を上げて。

僕はぼうつとしてしばらく言葉も忘れていた。ため息ばかりがもれた。(2) 僕のまったく知らない世界が僕達のすぐそばにあるという驚きで自然に顔がゆるんでしまつていた。必死に鳴くフクロウの赤ん坊は健気で愛しいほどだった。秋がそつと指を伸ばすとちいさなフクロウはまんまるな目をして嘴でつんつん突いた。首を傾げながら、待つてましたといわんばかりの勢いで。秋がくすぐつたそつうに肩をすくめ、指を引っ込めて、笑つた。それからまた手を伸ばして、笑つた。

なぜだか笑いが込み上げて仕方なかつた。ヒグラシのものがなし鳴き声が森から夕暮れににじむように伝わつてきた。斜めに差し

込んでくる紅い陽に照らされて汗がじわりとわいてきた。遠く山際が真つ赤に縁取られていた。木々の長い影は次第に闇に溶け込んでいくようだった。陽が暮れていくにつれて山の気配が向こうの方に遠のいていった。森がゆつくりと冷えていく匂いが僕は好きだった。「おい、黒焦げパンは何処にあんだ？」と秋がフクロウの羽を撫でながら言った。(3) 僕は笑った。秋の大好きな絵本に「フクロウのパン屋さん」というのがあった。学校には五十冊くらいの絵本があったがそれは秋のお気に入りだった。たまに三造先生が絵本を読んでくれることがあったが秋はいつでも「フクロウのパン屋さん」と言っただけでよかった。もうそれは二十回以上は読んであり、先生はまたかいの、と呆れたものだった。実際秋自身がすんで読む唯一の本とあってよかった。そんなわけで、あらずじも、台詞もすっかり覚えていて、先生の先回りをして言ってしまうほどだった。

「フクロウのパン屋さん」は木の上でパン屋さんをしているフクロウのお母さんが、五人の子供達にパンづくりを教える話だった。お母さんフクロウは実に大きなまあるい目をして優しそうだった。白いエプロンをしたお母さんフクロウは上手に粉をこねるのだが、子供達がやるとどうにもうまくいかず、おまけにいつも真つ黒焦げになってしまふのだった。子供達が悪戦苦闘して粉をこねる絵がおもしろかった。秋はその黒焦げパンが「とてもうまそう」だと言った。秋は何よりも「黒焦げパン」を食べたがっていたのだった。秋があまりにうまそう、と言うものだからなんだか本当においしそうに見えるまで今ではななも僕もその黒焦げパンは憧れのまどだった。

僕はなぜだか忍び笑いをした。波紋がひっそりと広がるようなヒグラシの鳴き声がいっそう静けさをかもしだしている森のなかで大きな声を出すことは相応しくなかったからかもしれない。(4) 暮れたいく空はゆつくりと藍色の幕をおろし始め、地面の冷えていく甘い懐かしい匂いが漂っていた。僕はなにか動かしがたいものを胸の

うちに感じていた。太陽の紅を横糸に、森の静寂を縦糸にした夕暮れのなかに織り込まれているような感じだった。

そのとき僕は四年生だった。僕は十一になったばかりで、秋が来れば秋も十だった。その年を終われば五年生になり、僕は本校に通わねばならなかった。それが僕には不安だった。しかし秋の瞳は僕が虹沢に来て初めて秋に会って以来なにも変わっていない。二人のひそやかな笑い声がまだ終わらないうちに葉っぱのたくさんついた木の枝をおもいきり揺さぶるような音がした。あつと顔を上げた時フクロウの顔が真つ正面にあった。あまりにも不意だった。その顔は一瞬にして僕をすくみ上げさせた。羽音は凄まじく木ぜんたいが揺すぶられている感じがした。

親フクロウだつ、と気づいた時は遅かった。フクロウは羽を広げると、とてつもなく大きく見えた。僕達におおいかぶさってまるで蒲団のようだった。僕達をひよいとつまみあげて空に舞い上がるなんてたやすいことのように思われた。僕達は無防備だった。不意をつかれて慌てふためいていた。しかも木の上だった。僕は声にならない叫び声を上げ一方の手で枝をつかみもう一方の手を前にかざした。落っこちないように両足に力を込めて股で木の枝をはさみ込みながら。木の上から見下ろすのは下から見るとは比べものにならないくらい高かった。飛び降りられる高さではなかった。

秋がああつと暗闇を貫くような短い叫び声を上げた。秋の腕にフクロウの爪がくいこんでいるのを僕は見た。手の甲と肘の真ん中あたりの、秋の身体のなかで最も日に焼けているところに狙いますようにフクロウの爪が突きささっていた。(5) 僕はその瞬間ちらりとしかしはつきりとフクロウの顔を見た。それは「フクロウおばさん」の朗らかな優しい顔などではなかった。エプロンなどまるで似合いません。かといってとりわけ凶暴そうとか恐ろしい顔ではな

った。見開かれたまんなな目が真ん中によっていて、嘴が曲がっているその顔は、いわば生真面目な顔だった。フクロウはひどく生真面目な顔をして猛然と羽ばたき秋に爪を立てたのだった。

〔注〕 なな——「僕」と秋の同級生。

（雨森 零「首飾り」による）

〔問1〕 (1) 秋の目は魔法のようだと僕は思っていた。とあるが、この表現から読み取れる「僕」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア あらゆるものに夢中になる秋の目の輝きを見て、同じようには熱中できない自分を情けなく思っていた。

イ すべてのを引き込んでしまいそうな秋の目の輝きを見て、なぜか自分まで楽しくなるようだと思っていた。

ウ 笑いをこらえながら話す秋の目の輝きを見て、何がおかしいのか自分にはとても分からないと思っていた。

エ 強い意気込みを表しているような秋の目の輝きを見て、自分にはない優れた行動力をねたましく思っていた。

〔問2〕

(2) 僕達のまったく知らない世界が僕達のすぐそばにあるという驚きで自然に顔がゆるんでしまっていた。とあるが、この表現から読み取れる「僕達」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 巢の中でフクロウの子供が以前よりもずっと力強く鳴く光景を目の当たりにして、安心している様子。

イ 巢の中には小さなフクロウの子供が二匹しかいないので、意外に寂しい光景にがっかりしている様子。

ウ 巢の中でフクロウの子供が必死に争っている光景に接して、その勢いに圧倒されてひるんでいる様子。

エ 巢の中に小さなかわいいフクロウの子供を見つけ、初めて接する光景に感激し心を奪われている様子。

〔問3〕 (3) 僕は笑った。とあるが、「僕」が「笑った」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア フクロウを描いた絵本に出てくる黒焦げパンのことを、秋もいつの間にか知っていたことが分かったから。

イ フクロウに聞けば黒焦げパンが手に入ると思うほど、秋が幼いころ読んだ絵本と現実を混同していたから。

ウ フクロウに食べさせようと「僕達」が相談して用意した黒焦げパンのことを、秋が忘れていなかったから。

エ フクロウを前にした秋が、絵本を通して「僕達」の憧れていた黒焦げパンのことをすかさず口にしたから。

〔問4〕

(4) 暮れていく空はゆっくりと藍色の幕をおろし始め、地面の冷えていく甘い懐かしい匂いが漂っていた。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 夕焼けの空の下で明るく照り映えている森の情景を、ありのままに写し出すように表現している。

イ 夕焼けに染まった空と闇に沈んだ森の情景を心の中に思い浮かべ、細部まで鮮やかに表現している。

ウ 暮れ方の空と夕闇が深まっていく森の情景を豊かな感覚でとらえ、たとえを用いながら表現している。

エ 暮れかかる空と夕闇が迫ってきた森の情景の変化をすばやくとらえ、順序立てて論理的に表現している。

〔問5〕

(5) 僕はその瞬間ちらりとしかはつきりとフクロウの顔を見た。とあるが、「僕」が見たフクロウの姿を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 童話に描かれていた優しそうな様子とは違ふ、人間を寄せつけないフクロウの姿。

イ 童話を読んで抱いていた親しみやすさと同様に、人間になつ

きやすいフクロウの姿。

ウ 童話に登場する主人公のおうような態度に似て、人間に対して無防備なフクロウの姿。

エ 童話に見られる乱暴な振る舞いとは裏腹に、人間を穏やかにけん制するフクロウの姿。

④ 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

食べる営みは文化でもある。世界の諸民族がそれぞれに発達させてきた食物とその料理法、食卓作法や食事に関する観念などは文化の産物としてとらえることができる。(第一段)

(1) それにもかかわらず食べることを文化としてとらえる視点は、従来の食生活研究の諸分野では無視されがちであった。食べる営みにかかわる研究で先行したのは、食物の物質的な側面と生物としての人間の新陳代謝のメカニズムに関する分野であった。食料生産に関する農学、人体と食物の関係を考察する栄養学、料理過程における食物の変化を調べる調理科学などの自然科学的手法を採用する学問である。自然科学は実験や観察を繰り返すことによって客観性を獲得し、その上に立って、現象を因果律によって説明可能なものとする普遍的な法則を導き出す。しかし、人間の行動を対象とする文化の研究において自然科学的な手法が有効なのは、ごく一部の分野に限られている。(第二段)

古典的な文化の定義によれば、「文化とは生物としての人間に遺伝的に繰り返された行動ではなく、人間の集団の中で後天的に習得した行動を指す。」という。食欲、性欲、睡眠に対する欲求など世界中の人間に共通した普遍的な行動がある。それらは遺伝的に埋め込まれた生物としての人間の本能である。しかし本能を充足させる方法は文化によって異なっている。食欲を満たすのにパンを食べる民族もあれば、米飯を食べる民族もある。食物を口に入れるとき、手づ

かみで食べる民族、フォークを使用する民族、箸で食べる民族がある、といった食に関する行動の違いは文化の違いを示すものである。(第二段)

人間の行動の深層には行動を支える価値観がある。価値観は個人の育った集団、すなわち文化的環境の中で形成される。食に関する価値観の違いが、それぞれの文化において利用する食物の種類、料理法、配膳法、盛りつけの美学、食事作法、嗜好や美味の概念などに反映している。自然科学は没価値性の上に成立することによって普遍性を獲得したのであるが、文化の観察や解釈において厳密に客観的な立場というものはありえない。したがって、文化は科学的な合理主義で解釈をすることができない側面をもっている。すべての民族に、食用可能にもかかわらず、食べることを禁じるさまざまな食物のタブーがある。科学的には非合理的現象であり、偏見が食料資源の有効利用を妨げているという見方がなされる。(2) しかし、非合理的行動ができるのが文化をもった動物としての人間であるともいえる。(第四段)

人間の食の特徴を簡潔に述べるなら、食物の文化に関しては「人間は料理をする動物である。」ということになる。料理という技術を発達させることによって人間の利用できる食料資源の種類が拡大したし、幼児や歯の少なくなった老人に適した食事を可能とし、衛生的かつ安全に食べることでできるようになり、ヒトという種の個体数の増大をもたらしたのである。「そのままでは食べられないものを食用可能なものに変化させる」、あるいは「そのままでは食べにくいものをより食べやすい状態に変化させる」技術として発生した技術が料理である。料理技術の中心は火熱の利用にあるが、上記のような料理の概念に従えば、泥のついた食物を洗ったり、食べやすいように切り刻むことも料理である。料理技術が進歩すると、調味料や香辛料を加えて味つけをすることや食欲をそるるように食器に美的

に盛りつけることも、料理の重要な技術とされるようになった。(第五段)

ただし、料理の概念は時代や文化によって変化する。たとえば、昔の日本の農家における飯炊きという料理は土間で稲もみをうすदैについて精白することから始まる一連の技術であったが、現在では米の精白は農産加工の作業とされ台所仕事の一部としての料理とはみなされない。英語の cook という言葉は、日本語で「料理をする」という意味を示す言葉であると考えられている。しかし、英米では cook という言葉は、火熱を利用した料理に限って適用されるのが普通である。したがって英米の概念からすれば、日本では料理の王座を占める食べ物とされる刺し身は「料理をしてない」食品であるということになる。こうしてみると料理という概念も文化によって異なるということになる。(第六段)

文化によって食べ方も異なる。東アジアでは中国を起源とする箸を使用して食事をするが、食べ方の細部をみると文化によって異なっていることが分かる。朝鮮半島では箸と一緒に柄の長い匙が食卓に置かれ、スープのように汁気の多い料理に匙を使うだけではなく、飯を匙で食べてもかまわない。匙を用いて飯を食べることは中国では元代まで行われたが、その後、飯は箸で食べることになり、現在では陶製の匙であるちりんげが食卓に置かれるが、それはスープ専用の道具となり、飯の場合はかゆ(粥)やチャーハン(炒飯)を食べるときに使うくらいのものである。したがって朝鮮半島で匙を使って飯を食べるのは、中国の古い風習を残すものである。それに対して、日本では王朝時代の貴族を除いては匙は普及せず箸だけで食事をする伝統であった。匙を使用しないので汁椀を手持ち上げて椀に口をつけるが、朝鮮半島では食器を持ち上げて食べるのは不作法とされる。(第七段)

ヨーロッパでは近代にナイフ・フォーク・スプーンを使用して食

事をするのが普及したが、それ以前は手づかみであった。現在でもインド亜大陸や東南アジア、西アジア、アフリカ、オセアニアなど手食が主流の地域もある。手食をするときでもイスラム圏やヒンズー圏では、食物をつまむのは右手だけに限定する慣習が守られるなど一定の食事作法にのっとって食べるのである。このように食物を口に入れる方法や食事作法も、文化によって違っているのである。(第八段)

冒頭に述べたように、食を文化として研究することが行われるようになったのはつい最近になってからのことである。新しい分野だけに研究の方法論も確立されていない。また、普遍的現象としてとらえることができる自然科学と違って多様性に満ちた文化を考察する際には普遍的な方法論は成立しがたいのである。(第九段)

マニュアルとしての方法論はないにしろ、文化を考察するときには有効な姿勢は存在する。それは比較をすることと歴史を知ることである。文化を比較することによって共通性と多様性を抽出することができる。(3) 先に簡単に述べた箸と匙の使い分けの例がそれである。またそれぞれの文化は歴史的に形成されたものであり、その形成過程において異なる文化間の交流によって伝えられた事柄が多い。食の国際化が進行している現代、われわれの食の文化がどのような方向に向かおうとしているかを考えるに当たっても、比較の視点と過去にたどってきた軌跡を整理する視点の双方が要請されるのである。(第十段)

(石毛直道「文化としての食」による)

〔注〕 メカニズム——仕組み。

因果律——すべてのできごとは、原因があって生じる必然的な結果であるという考え方。

タブー——社会的に禁止されている事柄。

マニュアル——手引き。

〔問1〕 (1) それにもかかわらず食べることを文化としてとらえる視点

点は、従来の食生活研究の諸分野では無視されがちであった。とあるが、「食べることを文化としてとらえる視点は、従来の食生活研究の諸分野では無視されがちであった」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 従来の自然科学的手法による食生活研究は食を文化としてとらえた研究と異なり、客観性を重視してこなかった、ということ。

イ 食生活研究では従来から食を文化としてとらえた研究だけが発達し、自然科学的手法による研究は顧みられなかった、ということ。

ウ 従来の食生活研究では自然科学的手法による研究が先行し、食を文化としてとらえた研究はほとんど行われなかった、ということ。

エ 食を文化としてとらえた研究は従来から自然科学的手法に頼っており、食生活研究の新しい分野とは認められなかった、ということ。

〔問2〕 (2) しかし、非合理的行動ができるのが文化をもった動物として人間であるともいえよう。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 人間は優れた文化の産物である科学技術を駆使して行動すると考えたから。

イ 人間はそれぞれの文化に基づく価値観に支えられた行動をする、と考えたから。

ウ 人間は文化より遺伝的に埋め込まれた本能に従って行動すると考えたから。

エ 人間は伝統よりも新しい文化の創造に重きを置いた行動をする、と考えたから。

〔問3〕 (3) 先に簡単に述べた箸と匙の使い分けの例がそれである。

とあるが、「箸と匙の使い分けの例がそれである」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 箸と匙の使い分けの例は、文化の比較を通して共通性と多様性を取り出すことができることを示している、ということ。

イ 箸と匙の使い分けの例は、普遍的な方法論を用いないと多様に満ちた文化は考察できないことを示している、ということ。

ウ 箸と匙の使い分けの例は、客観的な観察ですべての文化を共通に説明できる法則が発見されることを示している、ということ。

エ 箸と匙の使い分けの例は、多くの地域を比較すれば文化相互の共通性などないことが証明できることを示している、ということ。

〔問4〕 第七段と第八段との関係を説明したものとして適切なのは、次のうちではどれか。

ア 第七段で述べた内容について、第八段ではその問題点を明らかにして細かく分析している。

イ 第七段で述べた内容に対して、第八段ではそれと対立する内容を示して話題の転換を図っている。

ウ 第七段で述べた内容について、第八段ではそれを順序よく整理して問題の所在を明らかにしている。

エ 第七段で述べた内容を受けて、第八段ではそれに新たな具体例を付け加えて論旨を理解しやすくしている。

〔問5〕 この文章で筆者が述べている事柄や考えについて、あなたの考えたことを二百字以内にまとめ書き。なお、書き出しの際の空欄、や、や「なども、それぞれ字数に数えよ。

5 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

万葉時代の山野は、木の花、草の花に満ちていた。水の流れは透きとおり、春にはそのほとりにさわらびが萌え、山吹が影をうつし、秋には、水面をくれないに染めて、もみじが漂い流れた。

万葉びとたちは、そんな自然をどんなに愛したのか。彼らにとって、自然とは外からそれをただ賞美するものであったり、生活の飾りにするものではなかった。もつと自分たちと一体になったものであった。

森の中に行かっている檜の実を見れば、(1) ひとりぼっちでさびしかりうと思ひ、梅のつぼみを見れば、恋を抱いているのかと思つた。月光を浴び露にまみれて鳴くこおろぎ、枝もたわわな萩を胸で分けていく鹿。動物もまた彼らの友であった。

今、万葉の四季、万葉の自然を採りあげて書き、私はまた強く感じた。四季の歌、自然の歌も、また、万葉びとにとって愛の歌にほかならないと。

万葉の春は、雪降る日の梅の花からひらいていく。

(2) 梅の花咲けるがなかにふふめるは恋か隠れる雪を待つとか

茨田 王の歌 孝謙天皇の天平勝宝五年(七五三)の正月、石上宅嗣の家で宴会があつたときの歌である。

梅の花が咲いている中に、まだつぼみのままでいる花がある。そのつぼみの中には、恋の心を隠しているのであらうか。それとも、雪の降るのを待っているのであらうか。

その雪は春の雪である。(3) 恋か隠れるのその恋は、春を恋ひわびる心でもあらう。

はじめて、この歌を読んだとき、なんとハイセンスな歌であらうかと、目をみはった。

このパーティーのあるじ、石上宅嗣は漢詩の作者としても有名。たくさんの図書を蔵して、その書庫、芸亭は、わが国の図書館のは

じめといわれる。

茨田王は中務省の次官をしていた人だが、きっと宅嗣の文学友達であつたにちがいない。この歌にも、なにか閑雅な漢詩の風合いがある。

梅の花に雪が降りかかり、花を白くおおってしまったとき、こんな美しい歌を歌つた人がいた。「春雑歌」の中の「雪を詠む」歌。

梅の花降り覆ふ雪を包み持ち君に見せむと取れば消につつ 作者不明の歌である。

梅の花を降り覆う雪を、梅の花ごとのひらの中につつみこんで、あなたに見せようと何度も手に取るのだが、そのたびに、はかなく雪は消えてしまう。

若い日にこの歌を読んだとき、梅は紅梅か薄紅梅だと思った。そのほうが雪の白さが映えるからである。でも、実は、万葉の梅はみな白梅だそうである。

梅の白い花を、ふうわりと覆う雪のかすかな光。その風情を、(4) そのまま恋人に見せたくて、作者はそつと梅の花を指先でつまみとる。そして、そのひらの中につつみこむと、つかのま、春の淡雪は夢のように溶けてしまう。

作者は女性であらう。どうしても女性でなくては、という気さえする。繊細なその指先、ほのかに紅みのさしたてのひら、体温のあたたかさに溶けてゆく雪。そして、梅の花ひとつが濡れて残る。

「取れば消につつ」。(5) ここがまた芸がこまかい。「つつ」は継続をあらわす助詞である。彼女は何度も雪に覆われた梅の花を摘みとる。

でも、摘みとるはしから、雪は消えていく。ぜひ、この花とこの雪をあの人に見せたい。そんないじらしい思いのこもる歌である。全体にやさしいささやきのような口ぶりがある。

この場合も、彼女にとって、梅の花は単なる外界の風物ではない。自分の魂を托して人に贈るための、大切なとおしい花である。

〔注〕

まんだのおおきみいさのかみやか?
茨田王、石上宅嗣——ともに奈良時代の歌人。
なかつかさしやう
中務省——当時、都にあった役所の一つ。

(清川 妙「自然を歌う」による)

〔問1〕

(1) ひとりばつちでさびしかりうと思ひ、とあるが、「さびしかりうと思ひ」の「と」と同じ意味・用法のものを、次の各文の——をつけた「と」のうちから選べ。

ア 運動会は、雨が降ると延期になる。

イ 映画館を出ると既に日が暮れていた。

ウ 訪ねてきた旧友と卒業アルバムを見る。

エ 今年も白鳥が飛来したと新聞が報じた。

〔問2〕

(2) 梅の花咲けるがなかにふふめるはとあるが、ここでいう「ふふめる」は何がどのようなことを表しているのか。現代語で書かれた文章を参考にして、二十字以内にとめて書け。なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

〔問3〕

(3) 恋か隠れるのその恋は、春を恋いわびる心でもあろう。とあるが、ここでいう「春を恋いわびる心」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 早く春らしさを実感したいと願う気持ち。

イ 春が来ないことを腹立たしく思う気持ち。

ウ 遅れて来た春を心ゆくまで楽しむ気持ち。

エ 春が過ぎ去ってしまうのを惜しむ気持ち。

〔問4〕

(4) そのままとあるが、この言葉が直接かかるのは、次のうちのどれか。

ア 恋人に イ 見せたくて

ウ 指先で エ つまみとる

〔問5〕

(5) ここがまた芸がこまかい。とあるが、ここではどのようなことを「芸がこまかい」と述べているのか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 継続をあらわす助詞を使うことで独特のリズムを作り、躍動感を感じさせる表現にしていること。

イ 継続をあらわす助詞で歌を締めくくることによって、力強い印象を与える表現にしていること。

ウ 継続をあらわす助詞を巧みに用いることで、恋人に対する思いを感じさせる表現にしていること。

エ 継続をあらわす助詞を効果的に使い、恋人を思い続けた年月の長さを示す表現にしていること。

国語

解答

- ① (1) うるお (2) さいばい (3) よか
 (4) こうけん (5) くわ
- ② (1) 富 (2) 昼夜 (3) 望 (4) 植樹
 (5) 危険
- ③ (問1) イ (問2) エ
 (問3) エ (問4) ウ
 (問5) ア
- ④ (問1) ウ (問2) イ
 (問3) ア (問4) エ
 (問5) (略)
- ⑤ (問1) エ
 (問2) 梅の花が、まだつぼみのままであること。
 (問3) ア (問4) イ
 (問5) ウ

解説

①〔漢字の読み〕

(1) 湿り気を与えること。音読みは「ジュン」。「湿润(しめりけが多いこと)」「潤沢(豊富であること)」などの熟語がある。(2) 植物を植えて育てること。書き取り問題で「栽」が出されたら、「裁」と間違えないように注意しよう。(3) 自分の自由に使える時間、つまりひまな時間のこと。「余」の訓読みは「あま(る)」。「暇」の訓読みは「ひま」。(4) 何かのために力を尽くして寄与すること。「貢」の訓読みは「みつ(ぐ)」。(5) 音読みは「ショウ」。「詳細」「未詳」などの熟語がある。

②〔漢字の書き取り〕

(1) 音読みは「フ(ブ)」。「豊富」「貧富」などの熟語がある。(2) 昼と夜のこと。「昼夜の別なく」とは、昼も夜もということ。(3) 音読みは「ボウ」「モウ」。「希望」「所望」などの熟語がある。(4) 木を植えること。「樹」は「樹木」「針葉樹」の「ジュ」。(5) 「険」を「検」や「儉」と間違えないように。

③〔小説の読解〕出典；雨森零「首飾り」。

《本文の概要》僕と秋は櫟の木に登った。秋の目は、こっちまで楽しくさせるような強い輝きをもっていた。木の上にあるフクロウの巣にはひながいた。フクロウの赤ん坊を見ていると、笑いがこみ上げてきた。「フクロウのパン屋さ

ん」の絵本が大好きな秋は、「黒焦げパンは何処にあんだ」とフクロウのひなに話しかけた。僕たちは、夕暮れの静寂の中で忍び笑いをした。僕はなにか動かしがたいものを胸の中感じていた。その時親フクロウがやって来た。絵本の中の優しそうなフクロウとはまるで違う生真面目な顔をしたフクロウは、秋の腕に爪を立てた。

〔問1〕<心情の理解>傍線部の直後に「なんだかこっちまで楽しくなるような感じがしてくるのだ」とあるのがヒント。秋の目は「僕」を楽しんでいる気持ちにさせるのである。アの「情けなく」、ウの「自分にはとてもわからない」、エの「ねたましく」は、いずれも正しくない。

〔問2〕<状況の把握>「顔がゆるんでしまう」というのは、ほほえんでいる様子を表す。したがってイとウは除外できる。本文からは、「僕」たちがフクロウのひなを見るのは初めてであることが読みとれるので、アも不適當。

〔問3〕<文章内容の理解>傍線部のあとを読んでいけば、秋が好きな絵本に、フクロウの子どもが焼く黒焦げパンが出てくることがわかる。アとウが誤りであることはわかりやすい。秋が「フクロウのパン屋さん」が好きなのは、現在の話であるので、イの「秋が幼いころ読んだ絵本」という表現も正しくない。

〔問4〕<表現の理解>「藍色の幕」というのは、夕闇が迫る様子をたとえた表現。もう明るくはないのでアの「明るく照り映えている」は誤り。表現されているのは実際に見ている情景なので、イの「心の中に思い浮かべ」も不適當。エは「順序立てて論理的に」という部分が不適當。傍線部は、論理的というより、感覚的な表現である。

〔問5〕<文章内容の理解>傍線部のあとの部分をよく読もう。「『フクロウおばさん』の朗らかな優しい顔などではなかった」とある。実物のフクロウは、巣に近づく人間を追い払おうとして飛びかかってきたのである。つまり、童話のフクロウは優しく、実物のフクロウは人間を追い払おうとしている。これと合致しない選択肢は除外する。

④〔論説文の読解〕出典：石毛直道「文化としての食」。

《本文の概要》食は文化であるにもかかわらず、従来の食生活研究においては、そうした視点が無視されがちであった。人間は、文化の中で形成された価値観によって行動し、食用可能であるにもかかわらず食べることを禁じるような非

合理的な行動もする。しかし文化をもった人間だからこそ非合理的行動ができるのである。人間は料理をする動物であるが、料理の概念や食べ方は、文化によって異なる。食を文化として研究するようになったのは最近のことなので、方法が確立されていないが、考察する際の視点としては、比較をすることと歴史を知るという二つが重要である。

〔問1〕<文章内容の理解>傍線部を易しく言い換えると、「食を文化としてとらえる見方が、従来の食生活研究にはなかった」ということになる。傍線部のあとの二つの文には、従来の食生活研究では自然科学的手法による研究が先行していたということが述べられている。「客観性」は、自然科学的手法の特徴なので、アは誤り。イは、本文の内容と逆になっている。エも、食を文化としてとらえた研究は行われてこなかったという本文の内容と矛盾する。

〔問2〕<文章内容の理解>傍線部を含む段落の冒頭に「人間の行動の深層には行動を支える価値観がある」とあるのに注意する。人間はそれぞれの文化の中で培われた価値観にそって行動するので、例えばイスラム教徒は豚を食べないなど、非合理的(論理に合わないという意味)なこともするのである。非合理的行動の背景にそれぞれの文化に基づく価値観がある、という内容にふれていない選択肢はすべて誤り。

〔問3〕<文章内容の理解>傍線部中の「それ」は、直前の「文化を比較することによって共通性と多様性を抽出(取り出すという意味)することができる」を受けている。この点に着目すれば、まず「比較」にふれていないイとウが除外できる。エは「文化相互の共通性などない」という部分が誤り。第七・八段落には、食べ方に関して共通性(東アジアでは箸を使う)と多様性(食べ方は地域によって違う)の両方があることが述べられている。

〔問4〕<段落関係の把握>第七段落は、文化によって食べ方が異なることの例として、東アジアでの箸と匙の使われ方について述べている。第八段落では、ナイフ・フォーク・スプーンの使われ方、手づかみという食べ方について述べられているが、これも食べ方の具体例である。第七段落の冒頭の一文「文化によって食べ方も異なる」と、第八段落の末尾の一文「このように～文化によって違うのである」が対応していることから、この二つの段落が両方とも食べ

方の具体例を述べた段落だとわかる。

〔問5〕<作文>誤字・脱字や文法的な誤りのないこと、原稿用紙の正しい使い方を守ること、この二つは最低限の注意事項。そのうえで、自分が言いたいことが読み手にはっきり伝わるような書き方を心がけよう。

⑤〔説明文の読解—和歌の鑑賞〕

〔問1〕<品詞の用法>傍線部は「『ひとりぼっちでさびしかろう』と思い」という意味であり、この「と」は引用を表す。アの「と」は、順接の仮定「もし～したら」という意味。イの「と」は、順接の確定「～したところ」という意味。ウの「と」は、動作の対象を表す。ちなみに、「と」には格助詞の「と」と接続助詞の「と」がある。ア・イは接続助詞、ウ・エは格助詞である。

〔問2〕<現代語訳>「梅の花咲けるがなかにふふめる」を現代語で説明しているのは、「梅の花が咲いている中に、まだつぼみのままでいる花がある」という箇所である。この中で「ふふめる」に相当するのはどの部分だろうか。「何がどのようであることを表しているのか」という設問の条件に合うように「～が～であること。」という形にまとめよう。

〔問3〕<文章内容の理解>「恋いわびる」とは、恋しく思い待ちわびること。「早く春がくればいいのになあ」という気持ちである。この点を押さえれば、ウとエが誤りであることはわかりやすい。イは「腹立たしく思う」の部分が誤り。

〔問4〕<文の組み立て>「そのまま恋人に」「そのまま見せたくて」「そのまま指先で」「そのままつまみとる」というように、「そのまま」と選択肢の語をつなげてみて、意味がきちんと完結するものを選ぶ。イとエで迷うかもしれないが、迷ったときには「そのまま」に近い位置にある語を選ぶとよい。

〔問5〕<文章内容の理解>傍線部を含む段落の中の、傍線部からあとの部分を参考にしよう。「つつ」という継続の助詞を用いることにより、作者が「ぜひ、この花と雪をあの人に見せたい」と思いながら、何度も雪に覆われた梅の花を摘もうとしたことが感じられるのである。エも一見よさそうだが、ここでの「つつ」は、同じ動作を繰り返すことを意味しているのであり、「年月の長さ」までは表現していない。

＝読者へのメッセージ＝

みなさんは、木登りをしたことがありますか。③の課題文もそうでしたが、子どもが主人公となっている小説には、木登りをするシーンが出てくるものが少なくないように思います。木の上に登ると、ふだん見えないものが見え、いつもと違ったことを考えたり、いつもと違った気持ちになったりするのかもしれないですね。大人になると、なかなか木登りはできません。今のうちに経験しておくといいですよ。